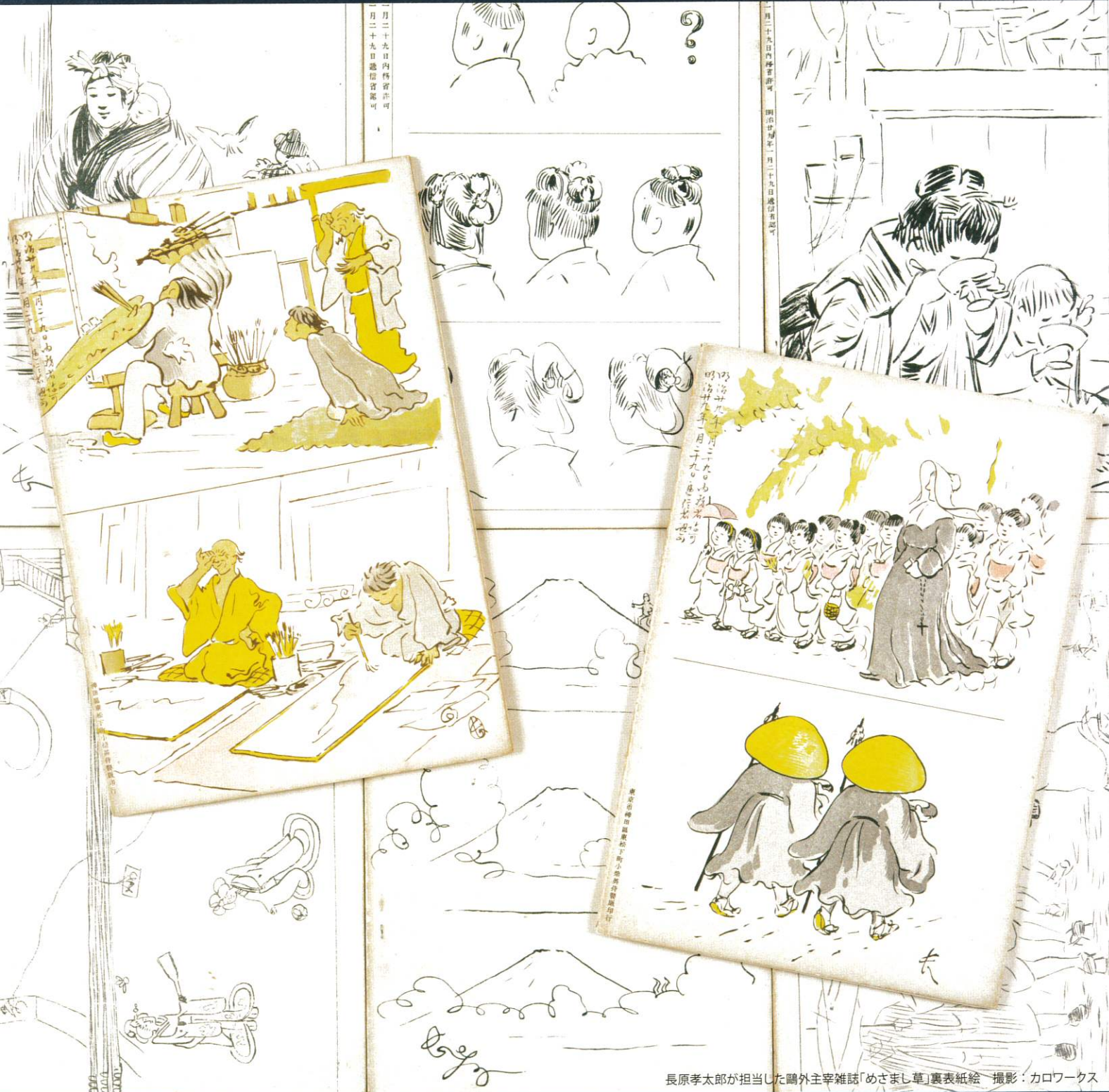


# 文京区立 森鷗外記念館NEWS

## No.45



長原孝太郎が担当した鷗外全宰雑誌「めさまし草」裏表紙絵 撮影：カロワークス

目次

巻頭コラム「漱石山房と千駄木の家」守谷賢一(新宿区立漱石山房記念館館長) / 展示報告 / カフェ便り / 展示のお知らせ  
 コレクション展「近所のアトリエ——動坂の画家・長原孝太郎と鷗外」 / 展示会場から / コラム「森茉莉生誕120年に  
 寄せて——茉莉の首飾り」島内裕子(放送大学教授) / 活動報告 / ショップ便り / これからの催しもの / 編集後記

# 巻頭コラム 漱石山房と千駄木の家

守谷賢一 (新宿区立漱石山房記念館館長)

新宿区立漱石山房記念館は、平成29(2017)年、夏目漱石に関する初の本格的な記念館として開館しました。漱石文学が多くの人に長く愛されるよう、漱石はもちろん、門下生や家族などの所縁の人たちに関する資料を収集・保管し、展示やイベントの開催によって紹介しています。いま当館が建っている場所には、かつて漱石が亡くなるまでの9年間を過ごした「漱石山房」と呼ばれる自宅がありました。明治40(1907)年、それまでの教師生活に終止符を打ち、東京朝日新聞社に入社して本格的に作家として生きていくことを決意した漱石は、この年の9月に生家に程近い早稲田南町に転居します。漱石は新宿で生まれ、新宿で亡くなったのです。『三四郎』、『それから』、『門』、『彼岸過迄』、『こゝろ』など多くの作品が、11年間の作家人生のうち約9年間を過ごした漱石山房で執筆されました。

学館の協力のもと、同館が所蔵する原資料をもとに製作されました。また、書棚には多くの洋書が並んでいます。これらのレプリカは東北大学附属図書館の協力で、漱石が実際に所蔵していた書籍の背表紙をもとに再現されたものです。書斎・客間を囲うようなベランダ式回廊を含めて、漱石のいた空間を体感いただけます。



資料展示室

展示室では、グラフィックパネルや映像などにより、漱石の作品世界、漱石を取り巻く人々、漱石と俳句、書画などについて紹介するほか、新宿区が所蔵する草稿や書簡、初版本などの資料を展示公開し、漱石の作品や人物関係などに焦点を当てた企画展を開催しています。現在は令和6年4月21日まで通常展「夏目漱石と漱石山房展」を開催中です。展示以外にも、漱石の月命日に門下生たちが漱石を偲んで集まった「九日会」にちなむ講演会や、漱石作品をテーマにした文学講座など、漱石に親しんでいただける事業に取り組んでいます。

鷗外と漱石には、一つの家を介した繋がりがあります。漱石は、明治36(1903)年、ロンドン留学から帰国してから早稲田南町の家に住むまで3度転居しています。そのひとつが千駄木の通称「猫の家」です。デビュー作『吾輩は猫である』



新宿区立漱石山房記念館

東京都新宿区早稲田南町7

開館時間 ● 10時～18時  
休館日 ● 毎週月曜日(休日の場合は開館し翌日休館)、年末年始ほか  
入館料 ● 通常展(12/23～4/21)一般300円、小・中学生100円

## 展示報告

### 特別展「千駄木の鷗外と漱石」二人の交流と作品を歩く

2023年10月7日(土)～2024年1月14日(日)

本展では、二大文豪として知られる森鷗外と夏目漱石の接点を振り返り、「千駄木」という場所を通して二人の足跡の交わりを紹介しました。

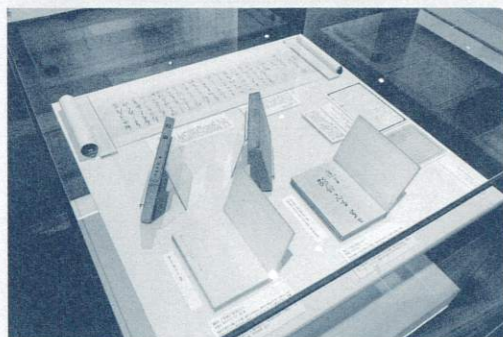
第一章「二人の生涯」では、それぞれの人生を、生い立ち、学び、仕事、作家活動など節目ごとに区切って、著作からの引用文や解説文で紹介しました。二人の人生を包括的に眺めることも、部分部分で見比べることもできるように、右側に鷗外、左側に漱石と向かい合わせに解説パネル(垂れ幕)を並べました。二人の人生の間を行き来しながら、歩み方の違いや共通点を鑑賞していただきました。

第二章「接点と交流」では、鷗外と漱石の日記や書簡を中心に、直接の交流、互いへの言及、同じ場に居合わせた時を一覧し、重要資料を展示しました。最初の接点を示



撮影：カロワークス

第一展示室 二人の生涯を紹介した解説パネル



献呈本 鷗外『涓滴』、漱石『門』が並ぶ



第二展示室 「千駄木の鷗外と漱石」

す資料として「漱石筆正岡子規宛書簡 明治24年8月3日」があります。学生時代の漱石が鷗外文学を高く評価していたことがわかる唯一の現存資料です。文学史的にも、また24歳の漱石の流麗な筆運びも見応えのあるこの書簡に、注目が集まりました。二人の交流の多くは自著を贈り合ったことでした。本展では、鷗外が漱石に贈った『涓滴』と、その礼として漱石が鷗外に贈った『門』をあわせて展示する初めての機会となりました。『涓滴』は鷗外から漱石への献呈本の中で、ただ一つ現存が確認されているものです。また『門』には、漱石からの献辞の脇に鷗外の書き込みがあり、二人の筆跡が並ぶ類のない一冊です。対面の機会は少なく、親しい交際の記録や直接の交流を示す資料があまりない二人ですが、こうした資料を一堂に展示することができました。

第三章は「千駄木の鷗外と漱石」です。「千駄木」での二人の共通点は、鷗外が暮らした約10年後に漱石も暮らし、『吾輩は猫である』を執筆した「駒込千駄木町五十七番地の家(通称「猫の家」)」です。二人が住んだこの家について、建築時期、鷗外と漱石の他に暮らした人々、博物館明治村に移築されるまでの履歴を一通り紹介しました。そして、千駄木が登場する二人の作品を紹介しました。猫の家の記憶が書き留められた漱石『吾輩は猫である』、登場人物が千駄木界隈を歩く『三四郎』『道草』、『三四郎』の人物たちが歩いた道や場所を行き交う鷗外『団子坂』『青年』。千駄木で鷗外と漱石が遭遇したという記録は残っていませんが、二人の作中人物たちの往来を見ることが出来ます。こうした交錯を確認しながら作品を読むと、また違った味わいが出てきます。

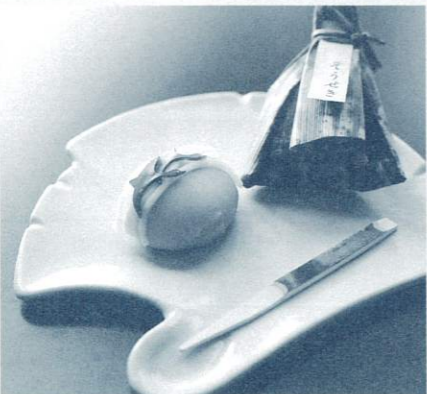
千駄木は、鷗外と漱石の暮らしの思い出や二人の作品が息づく場所です。場所に刻まれた記憶をこれからも伝えていきたいと思えます。

【展覧会図録販売中】

A4判 60頁 税込880円

展覧会関連講演会は、左記の通り終了しました。

- 「千駄木の豊島与志雄——野田宇太郎と鷗外漱石とを(引き合わせ)た男」  
講師・藤井淑禎氏(立教大学名誉教授)  
日時・11月25日(土)14時～15時30分
- 「漱石とモダンリズム」  
講師・奥泉光氏(作家、近畿大学教授)  
日時・12月16日(土)14時～15時30分



千駄木セット(ドリンク付) 税込1,000円

10月16日よりモリキネセットのパンが「ドイツパンの店タネ」から、大岡山にある「ジョーマッカー」のパンになりました。それに合わせてモリキネサンドのパンの種類も変わりました。新たなサンドはロゼンブロート(ライ麦パン)にセミドライソーセージ、ザワークラウト、クリームチーズ、粒マスタードを挟んでいます。加えて、ポテトチップスを添えた新生モリキネサンドをご用意ください。



カフェ便り

特別展「千駄木の鷗外と漱石」二人の交流と作品を歩く「開催に合わせて、モリキネカフェでは特別展期間限定メニュー「千駄木セット」を販売。文京区内の菓子店「虎久」にある、鷗外と漱石をテーマにした和菓子を提供しました。鷗外は小説『雁』をモチーフにした練りきり、漱石は好物だったといわれるピーナッツを使用したお菓子、その名も「そうせき」です。その2つを銀杏の葉をかたどった皿に乗せた、見た目もかわいらしいセットです。明治の二大文豪と当時の千駄木に思いを馳せながらお楽しみいただけます。千駄木セットは、1月14日までの販売です。

## 展示のお知らせ

コレクション展

### 「近所のアトリエ」

#### 動坂の画家・長原孝太郎と鷗外



- 1 鷗外『水沫集』縮刷版 春陽堂 大正5年  
鷗外第一著作集の縮刷版。長原が装丁と口絵(ドイツ留学時代の鷗外肖像)を手掛けた。
- 2 雑誌「めざまし草」裏表紙絵  
鷗外主宰雑誌。巻之3～36の裏表紙絵は長原が担当、世相や風俗を風刺的に描いた。
- 3 アンデルセン著、鷗外訳『即興詩人』春陽堂 明治35年  
長原による初めての鷗外著書の装丁。物語の舞台イタリヤを思わせるオリブを装飾的に記した。
- 4 長原孝太郎筆鷗外宛年賀状 大正5年1月4日付

鷗外が文京区に暮らし始めた明治20年代から大正期、区内には文学者だけでなく美術家も多く暮らし始めていました。鷗外の居宅・観潮楼(現・当館)にほど近い動坂にアトリエを構えた長原孝太郎(号・止水)もその一人です。長原は小山正太郎や原田直次郎、黒田清輝に学んだ後、東京美術学校(現・東京藝術大学美術学部)で長く教鞭を執った洋画家です。

鷗外と長原は原田を通じて出会ったようです。長原は鷗外の主宰雑誌「めざまし草」の裏表紙絵を皮切りに、鷗外の著書や主宰雑誌に優れた装丁を施しました。装丁以外にも、鷗外が長原の作品を評したり、植物を贈りあったり、鷗外没後には次女・杏奴と三男・類が長原に絵画を学ぶなど、公私に渡る交流がありました。

鷗外は長原のことを「動坂にゐる長原と云ふ友達(小説『田楽豆腐』)と記しています。二人は互いについて多くを語ることはありませんでしたが、鷗外の仕事や暮らし、コミュニティの中に、長原の存在をしばしば確認することができます。鷗外の「友達」長原孝太郎を、館蔵資料から紹介します。



動坂のアトリエにて 昭和5年

## 関連事業のお知らせ

展示会期間中に関連講演会を予定しております。申込方法は8頁をご覧ください。

講演会

「裏表紙」で鷗外を支えた画家、  
止水長原孝太郎

駒込千駄木町そして動坂町、観潮楼にほど近く暮らしていた二歳年下の画家と鷗外との文化交流の様を追います。

講師 須田喜代次氏

(大妻女子大学名誉教授・森鷗外記念会会長)

日時 2024年3月2日(土) 14時～15時30分

会場 文京区立森鷗外記念館 2階講座室

定員 50名(事前申込制)

参加費 無料(参加票と本展の観覧券半券が必要)

申込締切 2月19日(月) 必着

## ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。申込不要、当日の展示観覧券が必要です。

日時 2月14日(水)、3月20日(水・祝)

いずれも14時～(30分程度)

## 同時開催

### ○「記念館がみんなのアトリエ」

千駄木こどもギャラリー

コレクション展にちなみ、千駄木、文京区、家族や友だちを描いた絵画を募集します。

対象 主に小学生(幼児の方も可)

作品受付 2024年3月1日(金)～9日(土)

展示期間 3月20日(水・祝)～4月7日(日)

文京区立森鷗外記念館館内

※詳細は8頁および当館HPをご覧ください。

### ○鷗外誕生日記念行事

鷗外162回目の誕生日を記念して、2024年1月19日(金)は無料で展示会をご覧ください。

## 展示会場から

### 雑誌「新小説」

臨時号 文豪夏目漱石(大正6年1月)  
臨時増刊 文豪鷗外森林太郎(同11年8月)

【IF-4】

夏目漱石、森鷗外ともに死去に際していくつもの文芸雑誌で追悼特集が企画されました。中でも際立っているのは、臨時増刊を発行した「新小説」(春陽堂)です。大正5年12月9日に死去した漱石は大正6年1月2日に、大正11年7月9日に死去した鷗外は同年8月3日に、それぞれ「臨時号 文豪夏目漱石」、「臨時増刊 文豪鷗外森林太郎」と題して追悼号が発行されました。巻頭に肖像や住居、遺墨の写真を載せ、知友や作家らによる追憶、逸話、臨終の記録等で構成されています。目次には40名以上の氏名が並びました。なお、双方に名を連ねるのは赤木桁平(評論家)、泉鏡花(小説家)、上司小剣(小説家)、畔柳都太郎(評論家)、島崎藤村(小説家)、戸川秋骨(英文学者)、徳田秋声(小説家)、野上豊一郎(英文学者)の8名です(氏名は五十音順)。「新小説」では明治36年に小説家・尾崎紅葉が死去した際に小特集「紅葉山人追憶録」を掲載、その後も斎藤緑雨(明治37年没)、二葉亭四迷(明治42年没)などの追悼小特集を組みました。しかし、通常号とは別に追悼号を発行したのは、夏目漱石が初めてでした。「新小説」は、漱石、鷗外のほか臨時増刊追悼号を発行することなく大正15年に終刊しました。漱石と鷗外は、生前からその業績が他の文学者と一線を画し、死後そして今もなお顕彰され続ける「文豪」の双璧なのです。

参考文献:

- ・服部徹也『夏目漱石と春陽堂』(4)文豪夏目漱石の死―『新小説』の漱石追悼特集号  
([https://www.shunyudo.co.jp/blog/2020/06/souseki\\_to\\_shunyudo\\_04/](https://www.shunyudo.co.jp/blog/2020/06/souseki_to_shunyudo_04/)) 令和5年10月20日閲覧
- ・稲垣達郎、紅野敏郎編、解題「新小説目次・執筆者索引」『日本近代文学館』平成元年11月
- ・尾形国治編著『新小説』解説・総目次・索引「不二出版」昭和60年12月



## 長原孝太郎《残菊》

制作年不詳 油彩、キャンバス  
縦703mm×横552mm

【100268】



白い花瓶に生けられた、菊やススキなど秋の植物を描いた静物画です。一部の植物が萎れて葉を落としている一方で、中央に見える白、黄、赤各十数本ずつの菊は鮮やかに存在感を放っています。画面右上には「止水」の文字と記号化されたサインがあります。キャンバスの裏側には長原の名刺が貼り込まれており、長原が30年近く住んだ駒込動坂町(現・文京区千駄木4丁目)の住所の他、左上に「残菊」という記述が認められます(筆者は不明)。

長原の出身地にある岐阜県美術館には、『残菊』(昭和3年)と題された似た構図・主題の作品があります。本作との関連は現時点では判明していません。鷗外と長原は親しい間柄ではありましたが、鷗外が長原の絵画作品を所有していたことは確認されていません。本作も鷗外旧蔵ではなく、2018年度に区民の方から寄贈を受けた作品です。長原の生誕160年にあたる2024年、コレクション展「近所のアトリエ」動坂の画家・長原孝太郎と鷗外にて当館初公開します。



長原孝太郎

# コラム 森茉莉生誕120年に寄せて——茉莉の首飾り

島内裕子(放送大学教授)

森鷗外の子どもたち、於菟・茉莉・杏奴・類は、それぞれに父の思い出を書いた。

最も早かったのは、杏奴の『晩年の父』(昭和十一年)だった。それから十年を経て、於菟の『森鷗外』、さらにその後も、昭和三十年に於菟の『父親としての森鷗外』、三十一年に類の『鷗外の子供たち』、そして三十二年二月に茉莉の『父の帽子』が刊行された。

鷗外の妹の小金井喜美子も、弟の潤三郎も、兄鷗外の思い出を書いた。鷗外の魅力がこれらすべての本に結晶して、燦めいている。六人の中で、文学者として最も多彩な活動を行ったのが、森茉莉だった。父鷗外から受けた薫陶を基盤としつつも、二度の結婚生活から離れて、アパート一間での独居生活を貫いた後半の人生からは、稀に見る豊饒な文学世界が創り上げられた。

その出発点となった『父の帽子』は、千駄木の家で両親と過ごした幼年時代や、父亡き後の母との寂しい暮らし、鷗外の三十三回忌のことなども含んで、広がりがある。

筑摩書房版『森茉莉全集』全八巻には、各々の著作に解題が付き、初出も書かれているが、『父の帽子』の巻頭に置かれて、書名にもなったエッセイ『父の帽子』が「初出不詳なのは、以前から気がかりだった。先日、久しぶりに、国立国会図書館のデジタルコレクションで検索してみると、似た名前の作品が目にとまった。『女性教養』という雑誌の昭和三十一年十月号である【図版1】。もしかや……、と思つて、当該箇所を画面に呼び出してみると、その内容から、これが初出誌であろうと確信できた。誌面には、晩年の鷗外の横顔の写真的ほかに、少女時代の着物の茉莉の写真を掲載されていて、嬉しかった。記念すべき最初の著作の巻頭を飾ったエッセイ『父の帽子』は、初出誌では題名が「父の話(森鷗外)」となっており、冒頭部に、父鷗外の話の息子に語ると、いつも息子が優しい微笑で聞いてくれるので、そのつもりで書くという、執筆の背景も披露されている。

『父の帽子』は、刊行して間もなく『日本エッセイスト・クラブ賞』を受賞した。それを受けて、『女性教養』誌では、茉莉にインタビューして、昭和三十一年八月号の「女性文化人の面影」欄で紹介している。コーヒーカップを持つ茉莉の正面からの写真は、静かな落ち着いた着きを漂わせている。記事の最後は、山田珠樹との間の二人の息子たち

とも再会して訪問を受けるようになり、「幸福な心持ちでこの頃、ゆつくりゆつくりペンを取っている」という茉莉の近況で締め括られている。『女性教養』誌の人々が、『父の帽子』の受賞と近況を、我がことのように喜んでるのが伝わってくる。

ところで、先ほど触れた『女性教養』誌に、少女時代の茉莉の写真が掲載されていることは注目される。髪を結い上げずにそのまま垂らして、リボンで両側を結んでいる【図版2】。よく見ると、首飾りを付けているようにも見える。首飾りをつけて、髪を結い上げた着物の写真は、若き日の茉莉の代表的な肖像写真として、よく見かけるけれども、このような写真は珍しく、年齢も、十二、三歳頃とあり、幼く見える。

この写真姿を見てほどなく、いかなる巡り合わせだろうか、宮本百合子の『明日への精神』(実業之日本社、昭和十五年)の「歴史の落穂——鷗外・漱石・荷風の婦人観にふれて」という評論の中で、まさにこの写真への言及ではないか、と思われる記述があったのには、本当に驚いた。

百合子は、首飾りを付けた着物の茉莉の写真を、以前、どこかで見ていて、その時の印象を、具体的に書いていた。「冷をきちんと重ねた友禅の日本服の胸へ、頸飾のやうなものがかゝつてゐた。お下げ髪に結ばれてゐる白い大きいリボンとその和服の襟元を飾つてゐる西洋風の頸飾」「当時の日本の知識階級人の一般の趣向を遙かにぬいた御両親の和洋趣味の優雅な花が咲いてゐた」。

十一歳の時、父がドイツから取り寄せてくれたモザイクの首飾りを、茉莉は生涯大切にしていたが、時々、その姿が見えなくなるころがあり、それでも不思議と再び室内で見つけることができたと言ふ(『私から離れない首飾り』『森茉莉全集』第七巻)。

『女性教養』誌にも写真が掲載されている、和服の襟元を飾った、軽やかで美しいモザイクの首飾り。それは、時を超えて茉莉を見守り続ける、両親の愛情の象徴であろう。

森茉莉の批評精神はユーモアとなり、やるせなさや悲しみに包まれた心の遠景は、透명한薔薇色に染まって、空に溶け込む。森茉莉の自由で自在な文学世界は、美しく美しい首飾りのように、私たちの心模様を明るくしてくれる。



【図版1】『女性教養』昭和31年10月号 国立国会図書館蔵

【図版2】『女性教養』昭和31年10月号(部分) 国立国会図書館蔵

島内裕子  
しまうちゅうこ

東京大学文学部国文科卒、同大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。現在、放送大学教授。博士(文学)(東京大学)。中世を中心とする日本文学、特に『徒然草』が専門。『徒然草文化圏の生成と展開』(笠間書院、2009年)。ちくま学芸文庫『徒然草』『枕草子 上・下』。講談社文芸文庫『吉田健一未収録エッセイ』3冊編集。『樋口一葉』(コレクション日本歌人選、笠間書院、2019年)など。論文に、「廃園の茉莉」(『文藝別冊総特集 森茉莉』、河出書房新社、2003年)。

## 活動報告

「森鷗外記念館で論語塾」を開催しました

9月23日、30日の2回にわたり、新観潮楼歌会・森鷗外記念館で論語塾を開催しました。講師に論語塾講師・安岡定子氏を迎え、前半は孔子や論語について解説いただき、後半は論語に実際に触れる講座を行いました。論語の内容を現代に置き換えた解説はとてもしっかりやすく、2500年前の事とは思えないほど身近に感じます。後半は講師が選んだ漢文を講師が音読し、続けて参加者全員で音読した後、内容について考えていきます。音読は繰り返し行うことで、心地いい漢文のリズムが体に沁み込み、気持ちも高揚していきました。

鷗外の学びは藩校・養老館(現・島根県津和野町)に始まり、6歳頃からは論語も学んでいました。2回の講座を通して藩校の気分を味わいながら、少しだけ鷗外のルーツに近づくことが出来たように感じました。

開館記念日講演会を開催

11月1日は文京区立森鷗外記念館の開館記念日でした。今年2023年で11年目を迎えることができました。支えていただきました皆様へ感謝申し上げます。

11月3日の文化の日には、拓殖大学教授・村上祐紀氏による開館記念日講演会「森鷗外の歴史地図」を開催しました。鷗外の史伝の話題を中心に、鷗外が執筆する上で、より事実に基づきように徹底した「史料」探求とその姿勢などをお話いただきました。ご参加の方からは、史伝を読み直そうという

お声が多く聞かれ、充実した講演会となりました。

藩校マルクト in 鷗外記念館



魚沼市コーナーのようす

第20回全国藩校サミットが文京区で開かれました。これにちなんで、鷗外ゆかりの地である津和野町、北九州市、文京区と相互協力している魚沼市、歴史文化交流都市協定を結ぶ金沢市にご協力いただき、当館前で藩校マルクトを開催しました。開催日の11月3日、4日は、夏日となるほどの好天に恵まれ、街歩きを楽しみ、多くの方が足を止めて、小買物を楽しみました。魚沼からは、新米、果物、百合の花。金沢からは銘菓の数々、北九州は名物ぬか炊きや焼きそば、津和野はまめ茶や源氏巻きなどが好評でした。買い物だけでなく、お酒の試飲、試食などを楽しみながら、各自治体担当者とのお国自慢の会話に花が咲きました。

朗読会を開催しました

11月5日に文学座の俳優、采澤靖起氏による朗読会を開催しました。特別展「千駄木の鷗外と漱石」にちなみ、千駄木で書かれた漱石の第一作目の小説『吾輩は猫であ

る』より采澤氏ご自身が抜粋した箇所を、トークを交えながら朗読していただきました。2部構成の前半では有名な冒頭部分はもちろん、泥棒のエピソード、夫婦喧嘩のシーンなど、落語を思わせる苦沙弥先生一家のコミカルなやり取りが采澤さんの声を通して浮かび上がり、客席からは思わずすすす笑いが漏れました。後半は「猫」の目を通した漱石の人間観、生死観に注目し、軽い文体ながら静かでシニカルな猫の独白に、客席はじっと耳を傾け中には涙ぐむ方も。いつもの読書体験とは違った形で作品を味わう時間となりました。



新宿×文京スタンプラリーは

1月14日まで!

新宿×文京 漱石&鷗外スタンプラリー! ゆかりの地をめぐってオリジナル街パズルをもらおう! が2024年1月14日まで実施されています。期間中に新宿区立漱石山房記念館と当館、2館の展覧会をご覧いただきスタンプを集めるとオリジナル街パズルをプレゼントしています。この機会に新宿と文京の文学館を廻ってみてはいかがでしょう。お出かけの際は両館の開館日をご確認ください。

## ショップ便り

「鷗外パス」のご案内

当館の年間パスポート「鷗外パス」は、1年間の有効期間中何度でも展示を観覧することができます。また、当館併設のモリキネカフェでパスをご提示いただくとドリンクが2割引きでご利用いただけます。さらに、区内の文化施設に割引料金で入館いただけます(詳細は当館HPをご参照ください)。

変更前

スタンプを5個集めるとモリキネカフェでドリンク1杯無料、10個集めるとドリンクとお菓子をプレゼント。

変更後

スタンプを5個集めるとモリキネカフェでドリンク1杯無料、10個集めると好きなセットメニューひとつ無料。

次回コレクション展 近所のアトリエ—— 動坂の画家・長原孝太郎と鷗外 開幕の2024年1月19日から適用いたします。ますますお得になった「鷗外パス」を是非ご利用ください。当館受付にて1200円で販売しています。

※旧内容の鷗外パスをご利用のお客様も1月19日以降は変更後の内容が適用されます。

# これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

12月23日(土) 11:00～17:00  
 文の京ワークショップ「なつかしの年賀状をつくろう!」◎  
 ふみの日イベント  
 会場: エントランス 料金: 無料 ※用紙はご持参ください。  
 なつかしい「芋版」で年賀状をつくりましょう!ご家族やお友達と一緒にご参加ください。

1月19日(金) 10:00～17:30  
 鷗外誕生日記念行事 無料開館日 ◎  
 1月19日は鷗外の162回目の誕生日です。誕生日を記念して、無料で展覧会を観覧いただけます。

1月27日(土) 14:00～15:30  
 鷗外誕生日記念講演会  
 「鷗外はアイヌの少女、知里幸恵に会ったか?」  
 講師: 山崎一類氏(跡見学園女子大学名誉教授)  
 会場: 講座室 定員: 50名 料金: 1000円  
 申込締切: 1月12日(金)必着

3月2日(土) 14:00～15:30  
 展示関連講演会  
 「〈裏表紙〉で鷗外を支えた画家、止水長原孝太郎」  
 講師: 須田喜代次氏(大妻女子大学名誉教授、森鷗外記念会会長)  
 会場: 講座室 定員: 50名 料金: 無料 ※要展示観覧券(半券可) 申込締切: 2月19日(月)必着  
 駒込千駄木町そして動坂町、観潮楼にほど近く暮らしていた二歳年下の画家と鷗外との文化的交流の姿を追います。

3月20日(水・祝)～4月7日(日) 10:00～18:00  
 コレクション展関連企画  
 「記念館がみんなのアトリエ! 千駄木こどもギャラリー」◎  
 会場: 館内 対象: 主に小学生(幼児の方も可)  
 コレクション展「近所のアトリエ——動坂の画家・長原孝太郎と鷗外」の開催にちなみ、千駄木、文京区、家族や友達を描いた絵画を募集します。作品はすべて、期間中に館内に展示します。

【募集する作品について】  
 テーマ: 千駄木や文京区にちなんだもの、またはご家族やお友達を描いたもの  
 サイズ: 最大、八つ切りサイズの画用紙(27cm×38cm、縦横自由)  
 画材: 油彩は不可、水彩、色鉛筆、クレヨン、マジックなど自由  
 参加費: 無料(ひとり1点に限りです)  
 作品受付: 3月1日(金)～9日(土) 10:00～17:00  
 ※当日ご本人またはご家族の方が直接当館に搬入し、展示期間終了後は引き取りをお願いいたします。

## ◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき** 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール** 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jp までご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめ確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外での使用はいたしません。]

## 編集後記

本誌43号でも紹介したように、今春の連続テレビ小説「らんまん」をきっかけに植物学者・牧野富太郎が再注目されました。当館でも4月8日から10月1日まで常設コーナーの一部で、鷗外と牧野富太郎の交流を示す資料を展示紹介しました。さらにこれを機に、二人を特集した2017年度の特別展「鷗外の〈庭〉に咲く草花——牧野富太郎の植物園とともに」の展示図録を購入くださる方が多くいらっしゃいました。このように過去の展覧会でも、社会的注目や個々の関心の高まりから、いま新たに出会ってくださる方がいることを嬉しく思います。

また展覧会においても、過去の展示成果と現在の展示内容とが結びつくことがあります。1月14日まで開催の特別展「千駄木の鷗外と漱石——二人の交流と作品を歩く」では、鷗外と漱石の関係性を考える上で、昨秋の特別展「鷗外遺産」(夏目漱石筆鷗外宛書簡、夏目鏡子筆鷗外宛書簡を展示「いずれも森鷗外記念館(津和野)寄託」)で判明した事実を新たに踏まえて構成しました。当館ショップでは、売切れの場合を除き展示図録バックナンバーのご購入が可能ですので、色々とお楽しみください。



## 交通案内

- 電車をご利用の場合
  - ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
  - ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
  - ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
  - ・JR線・京成線「日暮里」駅 西口 徒歩15分
- バスをご利用の場合
  - ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
  - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
  - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「19特養ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分

※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511  
 URL: <https://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)  
 休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、  
 年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、燻蒸期間等

ogai  
 文京区立  
**森鷗外記念館**  
 Mori Ogai Memorial Museum